

天声人語

奈良時代に珍重された乳製品「蘇」の再現料理を食べて、作家の杉本苑子さんがもらした。

「三日三晩牛乳をかき混ぜる官吏が朝廷にいて、舐めたとか疑われて鞭打たれたりして」。杉

本さんらしい着眼点だと思う▼筆がさえるのは、歴史の舞台を動かす英雄を描くときより、舞台から落ちて辛酸をなめた者を描くとき。政略結婚を強いられた姫君、失脚して幽閉された能吏、正室とのいさかいに悩む側室――。そんな人生を好んで取り上げた▼根底には20歳で迎えた敗戦体験があるのだろう。10代を「軍国教育の沼底」で過ごし、負けてようやく「明治以降百年の洗脳」から覚めたのが創作の原点だと話す。ふたたび日本がおかしくなったとしても、「大政翼賛の小説を書くくらいなら私は筆を折る」。

親しかった作家永井路子さんとの対談できっぱり語っている▼享年91。訃報に接して胸によみがえったのは、直木賞を受賞した『孤愁の岸』である。幕府から濃尾平野で治水の難工事を命じられた薩摩藩士の苦悩に迫った。人は時代に逆らえぬもの、権力はむやみに人を苦しめるものと考えさせられた▼「私は葬式も墓も無用、骨は海にでも撒いてしまっただけいい」「使い古した『広辞苑』を一冊、埋めてくれ」。随想集『春風秋雨』にそんな「遺言」を書き残している▼家や土地は30年以上暮らした静岡県熱海市にすべて託して去った。何を残し、何を残さぬべきか。生涯かけて歴史から謙虚に学んだ作家ならではの旅立ちだった。